

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 古典サーンキヤ体系展開史論

——『ユクティディーピカー』による復古と改新——

氏 名 近 藤 隼 人

本論文は古典サーンキヤ体系展開史解明の一環として、イーシュヴァラクリシュナ(6世紀前半)著『サーンキヤカーリカー』(SK)に対する著者不明の注釈書『ユクティディーピカー』(YD)に焦点を当て解明を試みる。サーンキヤ体系はヴェーダやウパニシャッド、叙事詩等幾多の変遷を経ながら着々と体系化されてきたが、その完成はヴァールシャガニヤに帰される『シャシュティタントラ』(ST)をもって果たされ、特に認識論や論理学の面では一時期のインド思想界を牽引したほど隆盛を極めた。しかしながら、仏教など他学派から苛烈な批判を受け、同体系はそれまでに築いていた指導的地歩を他学派に譲り渡すことを余儀なくされた。かかる状況に対し、復権の光明を投げようと試みたのがYDであった。YDには他学派ならびに体系内の異説との論難応酬が散見されるが、その中ではSTの系譜を嗣ぐSKの完全性、無謬性が随所で強調され、またヴァールシャガニヤ派と目される断片も折に触れて引用される。さらには同派説に随順する側面のみならず、それを批判的に継承発展する側面も見受けられる。そのYDの意図としては、落魄の憂き目にあった古典サーンキヤ体系を救い取るべく、ST等の先蹤に発する伝統の継承と発展を表明することであったと考えられる。本論文では特に因果論(存在論)、証言論、輪廻主体論、解脱論という四論題に着目してサーンキヤ思想史上におけるYDの位置づけを解明するが、そのためにもYD著者が属していた思想環境や、YDを貫く哲学についても同時に解明を試みる。

本論文は序論、本論、結論、補遺の4部から構成され、本論は全4章から成る。以下、各

章の概要を示す。

第1章は因果論（存在論）の文脈におけるヴァールシャガニヤ派の見解に対して、*YD*がいかなる態度を示しているか論ずる。第1節ではサーンキヤ体系の基礎を支える因中有果説（satkāryavāda）に焦点を当てるが、同説によると結果は発生以前からその原因内に可能態として潜在するとされ、因果の区別は理論上見出されない。この因中有果説は主に世界の生成過程を説明する説として変容説と顕現説という二形式に大別されるが、このうちヴァールシャガニヤ派は後者を採用していたものと目される。*YD*もそれを継承しつつ顕現説を表明するが、その一方で変容説もその理論の基層に取り込む。これは*YD*が〈全体〉（avayavin）の存在を徹底的に批判しているように、因中有果説に相対立する因中無果説（asatkāryavāda）接近への回避策と推測される。しかしながら、*YD*は結果を三グナ（guṇa）の特定の配置と理解して要素の集合を承認しており、結果的には期せずして因中無果説に近い見解をとることとなった。それも*YD*がヴァールシャガニヤ派説を継承して発展を試みた結果であるが、その点について因中有果説に関わる*YD*を網羅的に検討しつつ明らかにする。そして第2節では、因中有果説が引き起こす具体的な問題点としてタンマートラ（tanmātra）とその派生物である元素（bhūta）との関係性、とりわけ元素における性質の逡増を論ずる。タンマートラは音声・感触・色・味・匂いの五種、元素は虚空・風・火・水・地の五種であり、因中有果説は虚空には音声、風には感触というように一対一対応の関係を理論上要請するが、実際には風には音声と感触、火には音声と感触と色というように逡増的に理解される。そして、この逡増の根拠をタンマートラ自体の性質の逡増に帰す説を打ち出した者こそヴァールシャガニヤ派であると*YD*は明言する。*YD*はその逡増説を明確に継承する一方で、タンマートラの「マートラ」に力点を置いてタンマートラ自体を純粹要素と解する。この解釈は明らかにヴァールシャガニヤ説に矛盾するが、タンマートラが本来有する原子的側面がその一因となっている。本節では逡増説を表明する他の諸文献も参照しつつ、その淵源を探るとともに、*YD*から読み取れるヴァールシャガニヤ説への随順とそれからの乖離・発展の過程を解明する。

第2章は*YD*における〈信頼できる言明〉（āptavacana）を扱い、正統ブラフマニズム思想としての古典サーンキヤ体系確立を企図する*YD*の試みを論ずる。第1節では、ヴェーダを〈信頼できる言明〉に包含させるか否かをめぐる*YD*の立場を扱う。SKにおいては供犠を伴うヴェーダ祭式に対する否定的態度が表明される一方で、*YD*も含めほぼすべての注釈書が〈信頼できる言明〉としてヴェーダを読み込んでいる。*YD*は文法学的考察も交えた曲解を含みつつも、他の注釈書に比してより理論的に〈信頼できる言明〉としてのヴェーダの權威確立を試みている。ただし*YD*は同じ「ヴェーダ」に属するものであっても、犠牲獣の殺害を規定するヴェーダと、知の獲得を通じた解脱を規定するウパニシャッドとを峻別し、専ら後者を〈信頼できる言明〉に値するものとして差別化を図る。そして*YD*には、*ST*における〈信頼できる言明〉の継承という側面も見受けられる。*ST*における〈信頼できる言明〉は、ヴェーダよりもむしろ特定の分野に通曉した者の言を念頭に置いたものであり、寛容な

姿勢を基調としている。この寛容姿勢は YD にも共通しており、〈信頼できる言明〉に関しても YD はヴァールシャガニヤ派説を継承していることを示す。そして第 2 節では、認識手段としての証言 (śabda) を推理 (anumāna) に還元する論者との論難応酬に焦点を当てる。この論敵は仏教の〈他の排除〉(anyāpoha) 論にもとづく語意伝達機能など三つの論点を軸に両者の無区別を訴えるが、その論点がディグナーガ (ca. 480–540) の著作に遡りうることを YD の解説を通じて解明する。それに関連して第 3 節では、YD が〈信頼できる言明〉に代表される「伝承」に対していかなる価値観を認めていたのか試論を提示する。

第 3 章では輪廻主体リング (liṅga) の構成要素について YD の立場を闡明するが、それを通じて YD の初期サーンキヤ思想との関係性の一端、ならびに YD 著者の思想環境解明を試みる。第 1 節ではそれに先立って SK がプルシャ解脱説に立脚するのか、それともプラクリティ解脱説に立脚するのかという問題について、可能な限り注釈書の見解を排して考察する。そして第 2 節ではリングの基体に関連して用いられる “vināviśeṣaiḥ” という SK の表現について考察するが、同表現をめぐる YD 以外の注釈書には不整合な記述が見受けられる。その一方で、YD は「八プラーナ」(prāṇāṣṭaka) という術語を持ち出し、注釈書の中でも整合的かつきわめて特異な解釈を展開する。この解釈からは “viśeṣa” がタンマートラ、すなわち音声などを指すとする用語法が導かれるが、その用語法は SK に反する一方で初期サーンキヤ思想を内包する『マハーバーラタ』第 12 巻モークシャダルマ部に遡りうる。SK に対立する用語をあえて用いる YD からは、初期サーンキヤ以来の伝統的用語法を重視する姿勢が窺われる。さらに第 3 節では、YD にのみ登場する「八プラーナ」と、類似概念である「八都城」(puryaṣṭaka) との比較考察を通じて YD の特異性を浮き彫りにする。そこでこの「八都城」が散逸プラーナ文献の祖本に由来する術語である旨を淵源から掘り起こしつつ、同表現が主としてヴェーダーンタ文献に散見されることを示す。その考察からは YD にもヴェーダーンタ文献にも概ね共通して、氣息や生体諸機能を指すプラーナが八都城の要素をなすことが明かされるが、そこに仄見える YD 著者とウパニシャッドならびにヴェーダーンタ思想との親和性を明るみに出す。

第 4 章は映像説、特に解脱論との関係性について試論を提示しながら、映像説に対する YD の態度を解明することで、YD が映像説という伝統的教説を超脱しつつ、いかなる哲学を樹立しようとしていたのか探求する。映像説とはプルシャと統覚 (buddhi) との間に想定された比喩的な交渉理論であるが、第 1 節では映像説断片の中でも古層に属すると考えられるアースリ断片とヴィンディヤヴァーシ断片を中心に、未解決であったアースリ断片のテキスト問題に対して最も整合的な解釈を与える。そして第 2 節ではヴァーチャスパティ・ミシュラ (10 世紀) による SK 注『タットヴァカウムディー』等の映像説を基礎としつつ、解脱論との接点についてサーンキヤとヨーガの差異にも着目しつつ探求する。最後に第 3 節では映像説と解脱論の関係性を論ずる発端となったバーヴィヴェーカ (ca. 480/490–570) 著『タルカジュヴァーラー』における映像説批判を読み解き、そこで鍵となる「補助」(upakāra) や「裨益」(anugraha) 概念の解明を介して YD へと軸足を移す。YD は映像説を十分に窺わ

せる記述を含みながらも、それを教説の根柢には据えていない。そこには映像説がはらむ本質的な問題を自覚していたと目される *YD* があり、伝統説を熟知しつつもそれをより合理的な形で取捨・改変していこうとする *YD* の姿勢が窺い知れる。

そして結論では本論で得られた知見をもとに、*YD* というサーンキヤ史上類書をみない文献の有する思想的傾向という観点を中心に結論を導き出す。

最後に補遺として、Appendix A に *SK* の諸版校合テキストおよび翻訳を提示し、*SK* を引用する文献やその関連文献を掲げる。その他、Appendix B には *YD* 批判校訂版の本文修訂、写本異読の訂正および新規掲出、誤植訂正の一覧を掲げ、Appendix C には *YD* の内容科段、Appendix D には *YD* にみられる様々な文献からの引用について、重要な関連情報について覚書を示す。